

(評価資料5)

<p>研 究 課 題</p>	<p>5 ツキノワグマの個体群動態と将来予測ならびに人里への出没メカニズムの解明 (29-33)</p>
<p>研究目的・背景</p>	<p>モデル地域でヘア・トラップ調査を実施して個体群動態と将来予測を行い、捕獲上限数の算定方法を開発する。また GPS テレメトリーによる行動圏の把握をもとに人里への出没メカニズムを解明する。</p>
<p>研究計画の概要</p>	<p>○モデル地域（岩手大学御明神演習林）でのヘア・トラップ調査の実施（平成29～33年度） ○動態モデルの構築（大量出没年の影響と密度差を考慮）（平成30年度） ○堅果類の結実豊凶調査の結果から自然増加率の推定（平成31年度） ○将来予測による捕獲上限数の算出方法の検討（平成32～33年度） ○GPS テレメトリーによる行動域の把握（平成29～30年度）</p>
<p>評 価 結 果</p>	<p>○総合評価 A（4人）・B（2人）・C（0人） ○総合意見 ・クマの人身被害や農作物への被害が頻発している近年では、本研究は喫緊に成果を求められる重要な研究である。 ・熊被害が全国的に報告されている中、推進すべき研究と思われる。他機関との連携と予算の確保については検討すべきと考える。 ・重要な研究であり、県民の健康にも直接関連する課題について地道に取り組んでおり評価できる研究である。 ・ツキノワグマによる人身事故を減少させ、共存を進めるための重要な研究である。より正確な生息頭数が把握できる成果を期待する。 ・ツキノワグマの個体群動態と将来予測は緊急・重要性があり、総合評価はA評価と考える。 ・長年にわたる研究であるが、フィールドワーク調査の主体を担うマンパワーが限定されているため、新機軸を打ち出しにくいようである。GPS テレメトリー調査などにおいても、他機関との連携・協働、他予算の活用などが望まれる。</p>
<p>センターの対応方針</p>	<p>① 研究計画のとおり実施 Ⅱ 一部見直しの上実施 Ⅲ 今後検討 Ⅳ 実施しない</p> <p>これまでの研究課題であったツキノワグマの個体数推定のための数理モデルについてさらに精度を上げるとともに、新たな調査手法の導入により喫緊の地域課題であるツキノワグマの生態や行動圏を把握し、人里への出没メカニズムを解明することにより、保護管理計画の策定等に貢献していきたい。 なお、研究に当たっては、他機関との密な連携を図っていきたい。</p>